

---

# さとみ 八犬伝

IORI

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さとみ 八犬伝

### 【Nコード】

N5023T

### 【作者名】

I O R I

### 【あらすじ】

古い縁によって導かれし運命の八犬士と謎の黒猫。普通的女子高生、里見さとみが巻き込まれていく非日常の物語。

## 序章

「春眠暁をおぼえず。」

かつて中国の詩人がそういう詩を作ったらしい。

負けず劣らずわが国にもすばらしい名言がある。

「寝る子は育つ。」

しかるに私はなぜ怒られているのか。

どうにも腑に落ちない。

ちよつと寝坊しただけなのに・・・。

「おい、ちゃんと聞いているのか？さとみさとみ。」

先生、その名を呼ばないで。

哀しくなってしまうから。

小学校の6年の夏まで私は結城さとみだった。

ところが突然の両親の離婚。

私は母に引き取られ、母方の姓を名乗ることとなった。

「里見」という名を。

「おい、聞いているのか？里見さとみ！」

絶対わざと言ってるな。コイツ。

ここは高校の生徒指導室。

小6から里見さとみとして生きてきた少女もいまや可憐な女子高生。

教育的指導という名の拷問と目下格闘中。

「ちゃんと反省しとるのか？里見さとみ。」

これはもう他人の名前をつかって遊んでいるとしか思えない。そう思っ**て**見れば目の奥が少し笑っているようにも見えてくる。うらめし**や**。

こうして生徒指導室での軟禁状態に見事耐え抜いた私は晴れて再びシャバの空気を吸うことが出来た。

「はい、おつとめご苦労さん。」

自分で自分を労った後、めい**っ**ぱい伸びをして新鮮な空気を肺の中に導きいれた。

「？」

ふと誰かに呼ばれた気がして振り返る。誰もいない。

「空耳？ま、いいか。帰る帰る。」

鞆を持ち直して、帰路に**つ**こうと歩を進めた先、校門の真ん中ら**辺**に何か落ちて**い**るのに気づいて、何となく足を止めた。

黒い物体。大きさはそれほど大きくない。

よくよく見てみると、それが背を向けて蹲**っ**ている黒い猫だと気づいた。

「何だ猫か……。」

言葉とは裏腹に何か不気味なものを感じる。

「幽霊の正体見たり枯れ尾花つてね。」

不安を払うように殊更明るく言うと、再び歩き出した。

さとみが脇を通り過ぎようとするとき、黒猫が一瞬顔を上げたように見えた。

「見いつけた。」

猫がしゃべった？

いやいや、そんな訳はない。空耳だ。

ほら、だって猫は知らん顔して蹲ったままだ。そうか私疲れてるんだ。早く帰ってご飯食べて寝よう。

そして足早に歩き出した背後から鋭い声が飛んだ。

「危ない!!」

声と同時に耳を劈くクラクション。

次の瞬間、背中に軽い衝撃を受けてさとみは道路脇に転がっていた。

車は減速することなく、そのまま走り去っていく。

「いったあ。もう、何なのよ!」

腰の辺りをさすりながら立ち上がったさとみは、視界の端に転がるものに気づいた。

傷だらけで息も絶え絶えに震えている犬。

「もしかしてあなたが助けてくれたの？」

さっき背中に受けた衝撃を思い返し、制服が汚れるのも構わず、その犬を抱えあげた。

「早く病院に連れて行かなくちゃ。」

何故かは分らない。分らないが、この犬を死なせてはいけない。何となくそんな気がした。

校門の黒猫はいつの間にかいなくなっていた。

## 序章（後書き）

お読みいただいた方々に心より感謝申し上げます。

## 序章 つづき

月のない夜。突然闇の一部が切り取られたように動いた。黒い猫。しかし普通の猫ではない。言い知れぬ不気味さを纏っている。それが証拠に闇夜に光るその瞳は血の様に紅かった。

あの犬は奇跡的に一命を取り留めた。

それはまさに奇跡と呼ぶのに相応しく、獣医を驚かすほどの回復力だった。

いま犬は八子という名を与えられて里見家の新たな家族として庭に？がれている。

まだ足に巻かれたままの包帯が痛々しいが、食欲もあるし、ちゃんとお手もする。

ちなみに八子の名付け親は母だ。おおかた忠犬八子公からでもとったのだろう。

詳しい事情は知らないし、今更知りたいとも思わないが、離婚の際、この家を出て行ったのは父の方だった。いまでも月々の生活費はちゃんと支払われているらしいが、私は出て行って以来父と会ったことはない。別に会いたいとも思わないが。

番犬として八子を飼うことに母がそれほど難色を示さなかったのも女二人だけの所帯にどこか不安を感じていたからかもしれない。

その割りに母には再婚の意思はないらしい。少なくとも私にはそういう素振りを見せたこともない。

「ハッチい。」

さとみがリードを片手に呼ぶと、ハチの顔に一瞬緊張が走ったように見えた。

何しろ獣医からようやく許可が出て、今日がはじめての散歩の日なのだ。

「ハチ君、キミの緊張は分るがその一步を踏み出さなければ世界は変わらないだよ。」

何かの映画で聞いたような台詞を言いながら首輪にリードを取り付ける。

ハチは尻尾を振ってそれに応えた。

「よう、なかなか似合ってるぜ。」

長身の男が笑いをかみ殺すように肩を揺らす。

「これが俺の役目だ。そんなことよりお前の方はどうなんだ？」

ハチは面白くもなさそうに極めて事務的な口調で返した。

「役目ねえ。相変わらず真面目だなアンタは。俺の方はアレだ。ぼちぼちってトコだな。」

「お前は相変わらずいい加減なようだな。」

「まあそういうなって。これでも結構忙しいんだぜ。護衛しながら調査するってのも。」

長身の男が愚痴るようにいうと、すかさずハチが提案した。

「それなら俺と代わるか？」

「いや、それは遠慮しとくよ。俺ダメなんだよなあ。首輪って奴が。」

男はそのままそそくさと逃げるように去っていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5023t/>

---

さとみ 八犬伝

2011年10月8日10時56分発行